

第1章 研究の背景と目的

1-1 研究の背景

1-1-1 環境の定義

現在、環境という言葉が世の中に氾濫しており、「環境とは何なのか」という問いに対する明確な解答や、厳密な定義はない。しかし、「環境という言葉の指しているものがあまりにも広範囲にわたりすぎているということである。環境というのは、要するに自分を取り巻くすべてのもののことなのだから、言ってみれば自然と人間のすべてが環境だということになる。」¹という広義の環境論や一般的なイメージである公害問題としての狭義の環境論など、環境の定義のばらつきがある。

1-1-2 迷走する環境

狭義の環境論は高度経済成長以降、経済の発展に対する代償として負の副産物である大気汚染や水質汚濁などに対処する事後対策の技術と技術的認識が根底にある。その一方、広義の環境論は複雑なものを複雑なまま見るというものの見方から、かかわる事象を広く取りすぎているため、問題とそれに対する解決方法の間の関係が不透明になる傾向が見られる。

この代表的なものとしてリサイクルがあげられる。自分の行動の一つ一つが明確なかたちで環境に対する負荷や影響として表れないため、環境に対する影響よりも目先の利益や利便性が優先される。その結果として、「環境にやさしい」行動、政策というプロパガンダとして認識され、一部の環境主義者のイデオロギーや、理想論の枠を越えることはできない。

1-2 観光をとりあげる意義

1-2-1 観光へのまなざし

観光とは、その語源を易経、観の掛の一説にある「観国之光、利用賓干王」のくだりに見ることができる。この意味は、自分の国の光を示し、観せることは、訪問してくれた他国の王様をもてなす最良の方法であるということである。また、英語では「tourism が観光にあたり、これを traveling for pleasure = 楽しみを求めての旅、すなわち観光旅行、² tourist industry = 観光にかかわる諸事業、すなわち観光事業」²と定義している。

近年では、観光事業としての観光の効果が期待されている。具体例として、大阪市は国際集客都市へ向けて先のオリンピック誘致や、ユニバーサルスタジオなどの巨大イベントやテーマパークによってビジター、交流人口を増加させようとする動きが活発化している。また、東京都による「ホテル税」の導入をめくり、議論がなされたのも記憶に新しい。しかしなにより 2002 年サッカーワールドカップの開催国となったことがあげられる。さらに、今回は韓国との共催という形であるから、試合によって両国をサッカーファンや関係者が大量に行き来することは確実である。

1-2-2 「観光」における研究対象としての環境

「観光学入門」³の環境と観光の章には、以下の内容が主なものである。

自然環境保護の系譜として、自然環境保護の近年の動きをとらえ、保護地域の指定による自然保護や、トラスト運動について述べている。また、自然に触れる観光として、自然との触れ合いに関する記述が見られた。最後に、観光と自然環境保護として、観光による自然環境へのインパクト、持続可能な観光、観光を通じた自然環境保全への貢献に関する記述が見られた。

以上のように、観光における環境は、自然環境として認識されている。したがって、「旅は恥のかき捨て」という言葉に代表されるような、観光客の“ハレ”的行動や、観光開発による観光地の自然環境や伝統文化の破壊に関するものが主流であるといえる。

1-2-3 エコツーリズム (eco-tourism)

「環境にやさしい観光」という意味で「エコツーリズム (eco-tourism)」が脚光を浴びるようになった。これは、単に観光行動が自然に負荷をかけないというだけでなく、観光で“消費”された金が観光地や観光対象となる自然環境の保全に役立つ、というものである。しかし、エコツーリズムはその素晴らしい理念のなかに、「持続可能な開発」と「環境保全」、利潤追求と自然との共生といった多くの矛盾を抱えている。

1-2-4 観光における環境の概念が存在する必然性

観光における環境が、自然環境に限定された状態で発展したエコツーリズム (eco-tourism) の「エコ＝環境」の等式が成立している。しかし、環境の概念は、自然環境のみを対象としているものではない。人間をとりまくすべての存在を環境とみなすと、観光はとりまく存在の一部である「光」を観る行動とすることができる。よって、前述の等式は限定された条件でのみ成立するものであり、観光には、とりまく環境となんらかの関連性がある。

1-3 観光論の分析

1-3-1 観光現象と観光論

観光のメカニズムやシステムを把握するためには、まず、ある任意の観光地における観光現象をフィールドワークなど現地で生じている具体的現象の全体像を調べる方法がある。他方、このような観光現象に関する論文を幅広くあつめ、関係するキー概念に基づいてしていくことで、かさなっている部分から全体像を明らかにする方法がある。

本研究の目的は、観光論の全体像に対して環境の概念のかさなりを定置し、類型化すること、およびそのかさなりの多様性と観光論の全体像を導き出すことである。したがって、本研究では後者の論のサーベイを手法とする。

1-3-2 サーベイ論文

論のサーベイのため、これまでどのような研究がなされているのか、ということをもとめるサーベイ論文の手法をとる。

そこで、本研究におけるサーベイ論文を以下のように定義する。「あるテーマについて、従来の研究動向・論争を丹念に調査して、それらを自分なりに取捨選択しながらいくつかの論点別にまとめて紹介し、自分の評価(全面的あるいは部分的な批判または肯定的評価)を各々について与える。その作業をつうじて、そのテーマについての自説の展開あるいは今後の研究の深化のために考察・展開されるべき課題や論点を明らかにする。また、もし可能なら自説の一定程度の展開またはその示唆を行なうことを目的とするものである。」⁴

本研究では、課題や論点の明示と同時に、観光論と環境の概念に関する自説の展開および示唆もおこなうこととする。

1-3-3 本研究の目的と意義

本研究の目的は、環境の概念が、観光論文においてどのように扱われているのか、について調べることによって、観光論における環境の概念の多様性や特異性および、環境の概念における観光論の変遷を明らかにすることである。

1-4 言葉の定義

本研究でもちいる言葉を以下のように定義した。

観光論、および環境の概念と「観光論」および「環境の概念」の区分は、前者を一般的な観光論、「」で閉じた後者を、本研究でもちいる場合に限定した「観光論」のなかの個別の論であり、同様に「環境の概念」のなかでの個別の概念とする。

1-5 論文の構成

以上の議論から、本研究の論文の構成を右図にまとめた。

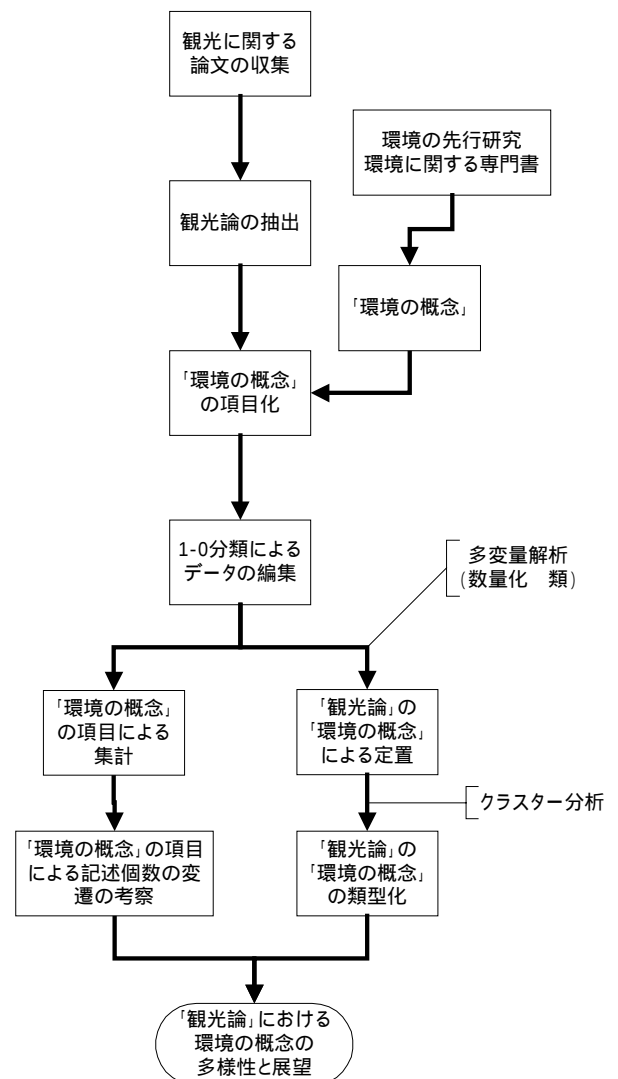


図 1.1 研究のフロー

<参考文献および引用文献>

- ¹ 石田紀郎 高橋正立編：環境学を学ぶ人のために, pp , 世界思想社, 1993
- ² 香川眞編：現代観光研究, 嵯峨野書院, pp2-3, 1996
- ³ 岡本伸之：観光学入門 ポスト・マスツーリズムの観光学, pp149-167, 有斐閣アルマ, 2001
- ⁴ 慶応大学経済学部 [http: / / www.econ.keio.ac.jp / staff / nobu / lecture / report - manual.htm](http://www.econ.keio.ac.jp/staff/nobu/lecture/report-manual.htm)